

研修医コーナー

医学の虜

大分市医師会立アルメイダ病院

久保田 智大

陽春の候、諸先生方におかれましては、ますますのご健勝のこととお慶び申し上げます。アルメイダ病院で初期研修をしております、2年次研修の久保田と申します。この度はこのような機会をいただき大変光栄に感じております。4月になり、今までお世話になっていた2年次の先輩方が専攻医として別の病院へ移り、今度は自分たちが後輩へ知識や技術を伝える番かと思うとまだまだ知識不足であり、不安が強いです。

さて、私事ではございますが、最近オーストラリアに足を運ぶことができました。海外という非日常の中で、日々対面している医学の世界から解放され、気持ちを軽くしようと思っておりました。しかしながら日常と離れるのはそう簡単ではありません。まずは飛行機でした。いままで飛行機に乗ったときは基本的に学生であり、飛行機が無事に飛ぶのを祈ればよかった立場ですが、ドラマのように「お客様の中にお医者様はおりませんか。」と言われたら、手を挙げて患者を見に行かなければならない立場になりました。それを思うとフライト中は想定されうる症状や疾患、鑑別、対応などが自分の頭の中をぐるぐる回っておりました。実際特にはそんなことも起こらず杞憂に終わりましたが、Great Barrier Reefに行く機会があり、その際に船にりましたが、揺れが激しく酔い止めを買うために出てきた単語がnausiaでまさか海外旅行中に医学英語を話す日が来るとは思わず、少し感動しました。ほかにも直近で消化器内科を回っているせいもあってか、丸いサンゴ礁が胃底腺ポリープに見えたりすることもありました。また、船の上で年配の方が倒れそうになったのを見かけ、それは一時的なものですすぐに改善はしたのですが、万が一助けが必要になった場合、鑑別や治療などを頭の片隅で考えておりました。それを説明しようとすれば相当する英単語をひねり出して会話をしないとなくなり、想像だけでも難易度の高いことだと実感いたしました。

今回の経験でどこに行こうと海外にいようと医学とは切っても切り離せない関係にあることを気づかされました。また、自分の体がどこにあって自分の脳はすぐに勝手に医学と絡めて思考をすると感じました。英語を使う機会も論文や学会等くらいなものかと考えておりましたが、これからは海外からの患者は増加すると考えられ、日本の病院にいても英語で説明をしなければならない機会が来ると思われます。その際にしっかりと対応できるように医学英語にも精通できるように英語の勉強も始めようと思いました。病院にいる時も、病院から出た後も自分自身は医師になったと実感し、その言葉に恥じぬように日々医学の勉強に励み、精進していきたいと強く思いました。ご精読ありがとうございました。